木工機械

静岡の木工機械産業は、木工の町に生まれ、木工業や住宅建築の発展とともに技術力を増し、地場産業の一翼を担うまでに成長しました。

一口でいうならば、地場産業密着型の木工機械といえます。昔から多種多様な特産木工品の産地であった静岡と最も深い関係にあったといえます。

木工機械のひとつ鉋（かんな）機が我が国に初めて姿を現したのは、慶応 2 年（1886）のことでした。アメリカ人ジミーが見世物として、江戸両国で作動させてみせました。しかし、これは一般人の目を楽しませても、職人は歯牙にもかけなかったといいます。

この風潮は静岡でも変わらず、職人は腕一本に頼る生産方法に終始していましたが、低コスト、大量生産が可能となることから問屋側が機械による製造方法を導入したのです。

まず輸入機が模倣され、それに独自の工夫が加わりました。大正 2 年(1913)、手押鉋削機の国産第 1 号が出て、その後、服部機械が昇降盤、鉋盤を改良開発し、静岡木工機械の発展に大きく貢献しています。

静岡の特性として、下駄製造機があります。当時の下駄作りは、手鋸か手挽鋸で木地を作り、これを「指取機」と異名をとった機械で周縁加工し、手鋸で仕上げていました。明治 45 年(1912)、浜松の河合小市（河合楽器創立者）が、清水の下駄商三島屋の依頼で加工工程の半分を仕上げる「５分づくり機」を考案しました。その後更なる機械化を目指し、静岡の望月鉄工、丸仲鉄工、望梅鉄工などが、下駄製造器機を手掛けました。

特に丸仲鉄工の下駄製造機は、万能木工機と呼ばれ、あらゆる木製雑貨類の製造に役立ち、次いで製作された超仕上鉋盤類は、国際水準を凌いだものでした。

静岡の家具は、鏡台の生産から発展し、サイドボードで名声を得ました。そのようなニーズに呼応して、専用機の開発が進みました。スライサー、ワイドベルトサンダー、プロフィールサンダー、エッヂバンダー、ボウリングマシン、プレス、搬送機などが代表的機種としてあげられます。

木工機械はマイコン化、Ｎ*Ｃ化が進み、作業効率を高め、人の作業量の軽減と刃物の耐久性が大幅に改善されました。

静岡の木工加工機械は、特産である木工製品製造と関連して根付き、その根を広げながら全国有数の業界となっています。

＊ＮＣとは

Numerical Control（数値制御装置）。工作機械やロボットの動作を数値情報とサーボ機構（位置・方位・姿勢などを自動制御する制御系）によって制御するシステムのこと。